



発行所  
公益社団法人 国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470  
http://www.kokubunken.or.jp/  
E-mail: info@kokubunken.or.jp  
月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

# 我が国の文化を見直さう

## — 理事長就任のご挨拶を兼ねて —

理事長 小柳 志乃夫

世代交代といふことで、今林賢郁前理事長の後を受けて四月一日より理事長に就任して一月半が経過した。

先輩方、特に戦前から本会を率ゐてこられた故小田村寅二郎先生を始め諸先生を思ふと、理事長の任に堪へぬ自分であることをつくづく思ふが、一方でこの道統は絶やしてはならない、かけがへのないものだといふ思ひがある。自分は昭和三十年の生まれで、翌年に発足した当会とほぼ同年齢といふ、全くの戦後世代であるが、先生方や先輩方の親身のご指導をうけつつ同輩後輩諸氏とともに学んできた。この学恩に感謝しつつ、諸友とともに新たな歩みを進めてゆきたいと思ふ。

ご挨拶が遅れたが、会員諸兄姉、関係各位のご支援とご鞭撻を改めてお願いする次第である。

昨日の午後は、同世代以下の首都圏の中堅・若手の会員知友と集まりをもった。二ヶ月ほど前から企画準備してきたものだが、コロナ禍で対面での集会は断念し、急遽オンラインでの開催となったが、懐かしい友人も交へて三十名程度のメンバーが参加してくれた。オンラインといふ制約はあるが皆の顔を見、声を聴けば元気が出る。会合では、東京での国文研活動の現状を紹介して協力を依頼するとともに、本会の原点を確認しよう、池松伸典副理事長(新任)の提案で、旧師・加納祐五先生の「文化力といふことについて—生き方としての文化と国の盛衰—」(本紙四〇五号・平成七年七月—長内俊平先生著「文化と文明」に再掲)を輪読した。

加納先生は福田恆存氏の言葉を敷衍しつつ「文化」とは所謂文化遺産

のやうに目の前に差し出せるものではなく、「吾々自身の」、うちにあってその心に生き生きと働き、おのづから吾々の姿、形として表れるやうなものを目指して言つてゐるのである。その様な文化にこそ、私達は生きる意味を見出し、意識的に無意識的にそれを愛し(愛)み守らうとする、そこに力が生れるのである」と述べられてゐて、また、その具体的な姿として河村幹雄博士著『名も無き民の心』にある、明治・大正時代の一車夫、一老嫗の物語が紹介されてゐた。

ここで言はれる内発的で生き生きとした「文化」をつぶさうとする動きに事かかない今日である。「男らしさ女らしさ」といふ言葉を死語にしようとする力はその端的な例であらう。この間の森喜朗元首相の舌禍事件も内容的にはオリンピック組織委員会では女性理事がしっかりとした発言をなさつて頼もしいのだがどうも話も長くてね:といった程度のものであった。それが切り取られて女性蔑視発言として総攻撃された。

しかし、女性はおしゃべり、男は黙つてゐるもの、といふのは一つの文化であった。高倉健は男だった。「男は黙つてサッポロビール」といふ言葉も国民が受け入れた人気キャッチコピーであった。サザエさんはおしゃべりだが、それが愛された。男

のあるべき姿も、女のあるべき姿もあつたし、しかも表の世界があれば、裏の世界もあつて、女性は家では強かつた。それ全体が文化であつた。さうした生き生きとした文化を壊さうとする力が働いて、ちよつとした言葉尻をとらへて差別だ、問題発言だと騒ぎ立てられる。まことに物いへば唇さむし、といふ世の中である。そこでのキーワードは男女平等であり、ジェンダーフリーである。

人権、平等、平和、今は環境保護、その観念自体は大事であるといへよう。しかし、地球環境を守ると言つて、太陽光パネルが里山を覆ふのをかしくないか。平和憲法を守るといふ、我が日本を覇権国家・共産中国の言ひなりにしてよいのか。

わが国には神話に遡る長い歴史があり、古代の大陸文化や近代の西洋文明など異文化を摂取しつつ豊かな文化を育んできた。そして、その日本文化の中核には、皇室を中心として神々を敬ひ、人々の和を貴ぶ国柄があつた。その心は言葉に、特に短歌に表現されてきた。この大切な文化伝統を受け継いでゆきたい。祖先の言葉を我々の心に、そしてまた青年の心に生き生きと蘇らせたい。さう願ふものである。

(五月十六日記、元日本興業銀行)